

国士館の思い出

国士館大学の人間教育

体育学部体育学科（昭和五九年三月）卒業 松本 吉英



はじめに

語を振り返りたいと思います。

一、国士館大学への道

貧しい母子家庭に育ち、病弱で家に引きこもって本ばかり読んでいた少年時代。いつも親に叱られては劣等感到苛まれていた若者が、国士館大学で先生方や友人と出会い、社会貢献するまでに成長する。その礎となったのが国士館大学の人間教育でした。

心身ともに脆弱だった若者が、理想に燃え、友情を育みながら、教師になるという目標に向かって一路邁進し、極真空手の黒帯を締め、教師となつてからサッカーの指導者としてS級コーチを取得するまでになる。国士館大学の人間教育が、私のような若者をどのように変えていったのか。手元にある当時の日記やノートから、担任（学生主事）であつた渡邊盛雄先生の話を中心に、この物

一九七九（昭和五四）年に熊本県立菊池高校を卒業後、働きながら大学に通うことになり、東京に出て中央大学の夜学に入學しました。アルバイト先は小田急永山駅ビルの中華レストランです。立ち仕事で、土日は終業以降のバスがなく、日野市程久保の下宿まで五キロを超える道のりを歩いて帰らねばなりません。寂しさと空腹で夜道を泣いて帰る日もありました。

アルバイトと学業の両立の厳しさからすぐに退学し、アルバイト先も都立多摩スポーツ会館に変えました。将来への不安に怯えながらも、教師になるという夢を実現

するために再度大学を目指すことになり、受験勉強とアルバイトに励みました。こうして受験することになったのが国士館大学です。

国士館大学を志望した理由は、教員採用試験の合格率が高いことと、受験科目に苦手な数学がなかったことです。面接の試験官は体育学部教授の鈴木八郎先生(当時、教務主任)でした。

「君はその恰好で寒くないかね。風邪をひかないようにしなさいよ。」

ジャージに爪先の割れたシューズを履く私は、過緊張でしっかりと質問に答えられませんでした。受験に失敗したら自分はどうなるのか、不安で世田谷キャンパスに合格発表を見に行く勇気がありません。代わりに結果を見に行ってもらった親戚から合格の知らせが届いた時の自分の反応は、全く思い出せません。

二、渡邊盛雄先生との出会い

〔国士館大学一の優れた学生になれ〕(渡邊先生)

一九八〇(昭和五五)年四月、国士館大学入学時の日

記に次のように記しています。

四月六日(曇) 松陰寮入寮

九日(雨) 入学式、四月中旬まで悪寒、下痢、

喘息

入寮する前日に熊本市の鶴屋パートで松平康隆氏(日本バレーボール協会専務理事)の講演を聴いて、今度こそ頑張ろうと思ったものの、四月中旬までは体調不良であり良いスタートではなかったようです。

入学直後、奨学金の申請で、主事室に担任(学生主事)の先生を訪ねました。礼の角度は三〇度。習った通りの作法で入室し、挨拶をしたところ、

「君はなかなか良い挨拶をするな」

との言葉。褒められることなどそれまでなかったことでした。それも出会ったばかりの先生に。これが渡邊盛雄先生とのふれ合いの始まりでした。

毎週水曜日一限目は、渡邊先生の生活学習指導でした。最初の講義は四月九日。国士館大学の教育理念である「誠意・勤労・見識・気魄」が如何なるものか説かれました。

渡邊先生は、旧帝国陸軍少佐、陸軍中野学校のご出身。「一五分前までに登校」集合は五分前に「挨拶は先手必勝」、

今も胸に残る数々の教えは、社会に出てどれほど役に立ったことでしょう。常に学生としての心構えや身だしなみを説かれた渡邊先生は、偉人の言葉や歴史にふれて、学生の人格陶冶に努められました。

この授業で「終生禁煙」と「皆勤」の決意を紙に書いて提出せよとのこと。禁煙の決意を提出しましたが、皆勤の決意は提出しませんでした。

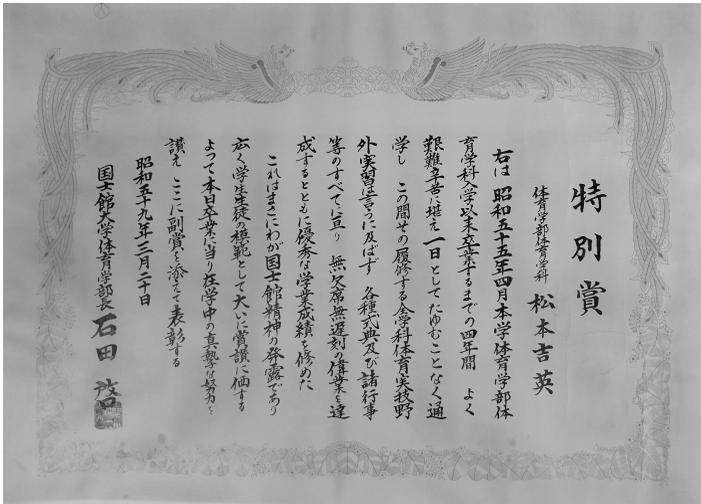
「皆勤の決意を提出していないのは松本だけだぞ」

そう微笑みながら提出を促す渡邊先生には申し訳ない思いでしたが、前の大学で夜学が続かなかった私に皆勤の自信は全くありませんでした。しかし結果的に、卒業式では実技・講義など全履修科目で、無遅刻無欠席を達成して特別賞を受賞することになり、副賞の腕時計は現在も使用しています。

四月一五日の講義では、ロシアの文豪トルストイに触れながら、渡邊先生が過去に担任された優秀な学生として、剣道部OB（昭和四七年三月体育学部卒）の足立和明先生が紹介されました。のちにこの足立先生のお力添えで、教育実習校が決まり、採用試験合格後の赴任先決定にも尽力して下さることになります。

渡邊先生は、「体育人」としての資質向上を図るべく、

「二特」(第二専攻特技)を薦めていらつしやいました。「二特」とは、専攻以外の実技を習練することです。私は陸上競技を専攻していましたが、二特として剣道を希望し



無遅刻無欠席の特別賞賞状

た場合、週一回の空き時間に剣道部の級友に稽古をつけてもらうわけです。

いつも二特の修練を見守られていた渡邊先生は、防具を持たない私にご自身の防具を貸してくださいました。

二特の剣道は管幹博君、近藤正利君、忍田壽生君、国藤昌彦君らの友情のもとに続けられ、大学二年時には、二特として剣道を希望した一〇名近い級友が、世田谷剣道連盟の昇段審査において二段を有するに至りました。昇段審査の型の稽古用に頂いた渡邊先生の木刀は、今も私のそばにあります。

三、学生生活

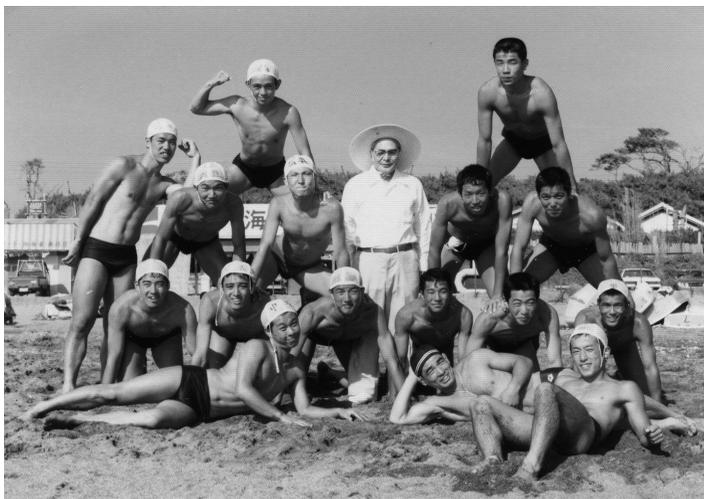
「卒業までに感動に胸を震わせ、涙する青春を証明しようじゃないか」（渡邊先生）

体育学部はA・B・Cの三クラス編成でした。私が在籍するC組は、一年時のみ鶴川キャンパスで授業を受けていました。しかし部活と寮は世田谷だったため、授業後、世田谷キャンパスに戻る頃には、所属していた陸上競技部の活動がそろそろ終了という状況になっていて、

トレーニングができません。すると同じ松陰寮生の柴原正明君が鶴川キャンパスから私のバッグを持ち帰ってくれることになり、雨天時を除いて、私は世田谷キャンパスまで片道二〇キロの道のりを走って帰ることにしました。二年に進級するまで、彼はバッグと友情を世田谷の松陰寮に持ち帰ってくれました。

鶴川では体育学部の上級生がいないので、一年生にはリラックスできるキャンパスでした。正門をくぐると左手に望嶽寮、右手に校舎と武道場がありました。大学構内の林は、まむし谷と呼ばれていました。この林間コースで鍛えていたサッカー部によると、まむしに噛まれても血清が用意されているから大丈夫ということでしたが、真偽のほどは不明です。世田谷、鶴川共に国士館大学内には独特の標語がありました。鶴川キャンパス校舎一階のトイレには「侍は後を残さぬ太刀さばき」と書かれた札がありました。後年、大学サッカー部との試合で鶴川キャンパスを訪れましたが、人工芝のピッチにプール、体育館という立派な施設になっていて驚いたものです。

高校までと違い、大学の講義は興味津々でした。教室



千葉県岩井海水浴場での臨海実習
前列右から2人目が森脇先生、中央が渡邊先生

の前方に着席して、緊張感で居眠りを遠ざけるようにしました。が、学生の眠りを誘うかどうかは講義の内容ではなく、先生の話し方にあると気付いたことは、教師になつてから役立ちました。

ある時、教室の最後列で仰臥午睡していた級友が退席処分を受けました。一瞬の静けさを挟んで沸き起こる「退場！退場！」の大合唱。優勝パレードのように両手を振りながら退席する級友と送別の手拍子。気まずい教室の空気を一変させた級友たち。厳しい表情で退席を命じた教授でしたが、目が笑っていたのを覚えています。

一九八〇（昭和五五）年七月には四泊五日の日程で、千葉県岩井海水浴場において臨海実習が行われました。私たち五班の担当教員は、柔道部の森脇保彦先生（体育学部助手）でした。翌一九八一年の世界柔道選手権でチャンピオンとなる森脇先生は朗らかで大変優しく、話すたびに動く大胸筋に、森脇先生みたいな男になりたいと、みんなで憧れたものでした。

臨海実習四日目の遠泳三時間は強風で中止、レクリエーション主体の一日となり、私たち五班は相撲・水球・リレー・騎馬戦で総合優勝してスイカ七個を獲得しました。夜の出し物は、どの班も爆笑の渦です。五班は豊田康人君の提案でエイトマンを歌いながら踊りました。人前で踊るのが初めてなら、大きな手拍子を受けたのも初めてでした。

実習直前に寮の風呂で股間の感染症を拾い、痒みに悩まされた実習でしたが、帰京のバスで寮生はみな帰りにくなく、暗い気持ちになったものです。実習日誌には「朝五時半からジョグ三〇分」「早く遠泳したい」とあります。楽しい五日間だったようです。

周年行事として、毎年一〇月一日、一二日に世田谷キャンパスのグラウンドで行なわれる体育学部内競技大会がありました。クラスの団結のもと、技量向上を図りつつ、計画・運営をすべて学生が行って、競技の管理運営を学びます。全学年一ニクラスの学生が、専門競技以外で戦う二日間のクラスマッチです。渡邊先生が過去に担任されたクラスは、一三期（昭和四七年三月卒）は優勝三回、一七期（昭和五一年三月卒）は優勝二回準優勝一回、二二期（昭和五五年三月卒）は四年連続優勝。どの先輩方も輝く戦歴を誇っていました。

競技大会に向けた入場行進の練習の時でした。渡邊先生が

「かしら右！」

と号令をかけるたびに級友たちが

「イーッ！」

と右手をかざします。それは仮面ライダーの敵役、シヨックカーの声でした。

「インディアンのような声を出してはいけません。さあもう一度。」

渡邊先生が何度号令をかけても

「イーッ！」

の声。みんながやるのに自分だけやらないのはいけないと思い、私も、

「イーッ！」

と元気良く発声しました。とうとう諦めた渡邊先生が

「行進の姿勢と隊列だけはしっかりやるように」

との指示にも

「イーッ！」

でした。競技の合間にスポ根アニメの「巨人の星」を歌いながら、イントロ場面を演じた級友の応援パフォーマンスも、クラスの垣根を越えて大きな拍手喝采を浴びました。私はこの自由闊達なクラスが大好きでした。

私たちC組二五期は先輩方に続く成績を挙げられませんでした。私たちが、専門外でも優れた技量を有する級友がたくさんいて、競技も応援も大変楽しい体育学部内競技大会



体育学部内競技大会実行委員

でした。

時に講師を招いた講演会もありました。

さすがはプロレスの頂上を極めた方だ。男の生きざま、特に男女間においての男らしさの話は勉強に

なった。(中略) 意義あるお話を謹聴できて幸せた。

大学二年、一九八一年一月一三日、アントニオ猪木氏の講演会が開催された時の日記です。講義以外にも、色々と経験し、学ぶ機会が多い、充実した学生生活でした。

四、箱根駅伝の思い出

「日本中の若者の良心を代表する学生になれ」(渡邊先生)

陸上競技部とはいえ、駄馬の私は箱根駅伝では幹事となりました。部の監督は西山一行先生(体育学部助教授)です。「西山先生に朝食をご馳走になった」「アップシューズを頂いた」「消灯を過ぎた飲酒で叱られ朝五時半練習」など、日記のところに西山先生との交流のしるしが残されています。

一九八二(昭和五七)年一月に行われた第五八回東京箱根間往復大学駅伝競走では、二年次生の私は伴走車に乗り、タイムキーパーを務めました。区間ごとに設けた目印を基にラップタイムを計測し、目標タイムを並べた用紙に記入して、その差を西山先生に伝える役目です。



大学4年、第60回箱根駅伝の時のメンバー
(右奥最後方が著者)

西山先生は厳しい先生でした。タイムを問われたら即答しなくてはなりません。以前、トラックの周回カウントに失敗して大目玉を頂いたことがあったので、念のために、予備を含めて三つのストップウォッチを用意しまし

た。

当時の伴走車は市ヶ谷駐屯地のジープで、オープントップの吹きさらしです。計測失敗への緊張と箱根山中の寒さで、とうとう尿意をこらえ切れなくなりました。ビニール袋は用意したものの、沿道の視線にどうしても車上で用を足せません。西山先生のお叱りを覚悟で申し出たところ、あっさり許可が出て、同乗の関東学生陸上連盟の幹事共々、ジープから飛び降り用を足しました。

レースの結果は一〇位。当時は九位までだったシード権を、あと一步のところで逃がしました。

五、大学最後の年

「実習、教授、卒論、クラブと忙しい年だが頑張りました。就職は大きな口マンだ。」(渡邊先生)

一九八三年度に四年次生となりますが、三年次生の年末に書かれた日記には、「教育法の宿題」「スライド作成」「テスト準備」「卒論」「受験勉強」などが散見され、大学最後の年に向け、日々学業に追われていたことがわかります。

しない学生生活を必ず送ろう。

この日の日記には、同期生の岡田雅次君（現体育学部教授）の第六二回関東学生陸上競技対校選手権大会での活躍を記しています。これは、当時日本歴代三位の好記録で、ともに汗を流した同期生の成果に喜びもひとしおでした。

この六週間後の七月四日、世田谷キャンパスで殺人事件が起きました。当日、北海道の教員採用試験から下宿に戻ったところで事件を知りました。新聞をとらず、テレビも持たず、ことの顛末がどうかを知ったのは後になってからでした。学内の掲示板以外の場所に、剥がされては張り出される張り紙の文言から、職員間がうまくいっていないことは感じ取れました。大学新聞に掲載したいと、教育実習の感想文を求められて提出しましたが、新聞に掲載されることはありませんでした。大学自体は慌ただしなかったのかもしれませんが。意図不明の署名活動や詰めかけるメディアの取材が学生に向けられることもありましたが、授業中の先生方は平常どおりで、緘口令らしきものが引かれたこともありませんでした。この頃の日記には、道場通いをしていた空手の稽古のこ

と、受験勉強のこと、教育実習校を訪ねたことや、友人たちとの買物のことが書かれています。事件には触れず、普段通りの学生生活であったようです。

事件の影響からか、九月二五日におこなわれる教員採用二次試験を学生服で受験することへの是非の話が、級友の間で持ち上がりました。教育実習校で学生服姿を褒められていたので、就職課職員伊藤等氏にご相談すると、

「君なら裸でも大丈夫だ」

と背中を押していただいたので、学生服で面接に臨みました。大勢の受験生の中で学生服（靴は運動靴）は私だけだったと記憶しています。

教員採用試験の二次試験での面接は今でもはっきりと覚えていて、次のようなやりとりがありました。

「君の目の前で中学生が喫煙している、どうするか。」

「暴力は嫌いです。でも愛のムチはあると思います。私が今も尊敬する先生は私を叩いてくれた先生です。」

「もし君が教育の現場に入ったら、その気持ちを忘れずに頑張りなさい。」

自分に自信が持てず、物怖じばかりしていた若者が、

六、大学卒業後

こうして目標にしていた教師となることができましたが、初任校でサッカーと出会うこととなります。そして二七年後には福井県代表の高校サッカー部監督として全国高校サッカー選手権大会に出場することになります。全国大会に出場するたびに、サッカー部OB会の大澤英雄先生（昭和三五年卒、現理事長、元国士館大学サッカー部監督）が激励してくださいました。初出場の九〇回大会は大敗しましたが、大澤先生をはじめ、南谷光一先生（昭和四〇年卒、元日大三島高校サッカー部監督）、細田三二先生（昭和五三年卒、現体育学部教授）、田中康嗣先生（昭和五三年卒、東京都サッカー協会育成部役員）、山本昌邦氏（昭和五五年卒、元U-二三サッカー日本代表監督）、下川浩之氏（昭和五八年卒、現Jリーグ理事）らに

「負けは失敗ではない。一番の失敗は挑戦しないこと。挑戦するからこそ、あれは自分に必要な失敗だったと振り返ることができるとだ。」と励まされました。

他にも、内山篤氏（昭和五七年卒、元U-二〇サッカー日本代表監督）からは日本協会の研修で講義や実技の指導を受けました。渡辺真人氏（昭和六二年卒、日本サッカー協会）は福井県のサッカー協会のことで大変力になってくださいました。進藤正幸先生（昭和五六年卒、東京工業大学附属科学技術高校サッカー部監督）は全国大会で都内に練習会場を用意してくださり、武田善和先生（昭和五六年卒、旧姓佐山、上田西高校副校長）、守屋保先生（昭和五八年卒、西武台高校サッカー部監督）、クラスメイトの駒澤隆一先生（昭和五九年卒、日本文理高校サッカー部監督）、小島時和先生（昭和六二年卒、正智深谷高校サッカー部監督）をはじめOBの方々は試合相手となってくださいます。こうしたサッカー部OBの方々のお力添えのおかげで、今では力及ばずとも強豪相手と競えるまでになりました。

七、国士館精神

卒業して九年後の一九九三（平成五）年、私は結婚することになり、お世話になった渡邊先生と足立先生を

招待しました。病を押して披露宴に出席して下さった渡

邊先生の祝辞を、足立先生が代読してくださいました。

渡邊先生が亡くなられたのは、それからまもなくのことです。学生に身をもつて国士館精神を示された渡邊先生。

「武士道は敵に勝つの道に非ず、己を律するの道なり」渡邊先生を偲ぶたびに、この言葉がよぎります。

大学の松陰寮では「僕ではなく私」「電話は三回以内に取る」「廊下の中央を歩かない」などを学びました。

三帖の下宿生活では整理整頓を身につけました。そうした良い習慣は社会に出て高く評価されました。

教員一年目に肺炎で入院した折、身を案じる葉書を送ってくださいだった食堂「千草」のご夫妻。世田谷二丁目にある行きつけの食堂でした。空手の稽古で負ったケガの治療に明け暮れた世田谷線松陰神社駅近くの藤山整形外科、「資格を取るまで学費を持つから理学療法士としてうちで働かないか」という院長先生の言葉には揺れませんでした。大学界隈の方々とのふれ合いも大切な思い出です。

おわりに

教育は、基本の習慣づけと悪い習慣の矯正にあると言われます。転んでもすぐに起き上がる、柔道の受け身にある「負けじ魂」。剣道の「残心」のような突然の変化にもすぐに対応できる、油断の戒めと節度ある態度。脆弱だった若者は、国士館大学での日々の教育で心身ともに鍛えられたのです。自分が変われば人の評価が変わり、運命まで変わることを、身を持って学びました。それが国士館大学の人間教育でした。

尚武の校風であり、また質実剛健の国士館大学ですが、国士館の教育理念「誠意・勤労・見識・気魄」の最初は気魄ではなく誠意です。誠意とは約束を守ること、嘘をつかないことであり、誠実な言葉であるほど守るのが難しく、ごまかしが効きません。そうした言葉を最初に置いたところに、国士館大学の教育理念の素晴らしさがあるとあります。そして「最高の理想に燃え、最善の師友に親しみ、国士館精神の特性を涵養すべし」という教えを実践した脆弱な若者が、その理念の素晴らしさを証明したと自負しています。

国士館の教育理念「誠意・勤労・見識・気魄」の八文字は覚えやすく、人としての基本が最大公約数で示されています。これを誇りに思うだけでなく、実践し社会に貢献することが、母校の発展に尽くすことになると思います。

振り返るほどに書き尽くせないほどの素晴らしい出会いがあったことに、改めて気づかされました。還暦を前にして、再び母校に導かれた幸せに深く感謝し、筆を置きます。

雑誌『大民』を探しています！

大民

国士館の淵源は、青年大民団の結成にあります。青年大民団の機関誌、1916年創刊の雑誌『大民』は、本学の沿革を知るための大切な資料です。しかし本学では、残念ながらほとんど原本を所蔵しておりません。

ついては、雑誌『大民』の原本を探しています。ご提供または所蔵先の情報などをお寄せ下さい。皆様のご協力を、何卒よろしくお願いいたします。

雑誌『大民』の概要

創刊：1916年6月15日、月刊誌
発行：青年大民団（後に大民団・大民俱樂部・大民社へ変遷）
注記：1924年7月（第11巻）より『生存同盟』に改題

ご連絡先
国士館史資料室

TEL 03-3418-2691

E-MAIL archives@kokushikan.ac.jp

所蔵確認済小機関：国立国会図書館／静岡県立図書館／群馬県立図書館／北海道大学図書館／法政大学大原社会問題研究所／神戸大学社会科学系図書館／大宅社一文庫

1916 ▶ 1917

『大民』創刊 ▶ 国士館創立